

カラーフィールド絵画の受容における大衆文化の意義

加治屋 健司（京都市立芸術大学）

本発表は、ヘレン・フランケンサーラー、モーリス・ルイス、ケネス・ノーランド、ジュールズ・オリツキ、フランク・ステラらによるアメリカのカラーフィールド絵画の受容において、従来の解釈では軽視されてきた大衆文化が大きく関係していたことを明らかにするものである。

カラーフィールド絵画は、1950年代から60年代にかけて、モダニズムの美術批評家であるクレメント・グリーンバーグやマイケル・フリードによって、モダニズムを体現するものとして高く評価された。絵画以外の要素を排除して、絵画の本質と彼らが考えた平面性と視覚性を強調する絵画とみなされてきた。

しかし、カラーフィールド絵画に関する同時代の美術批評は、グリーンバーグやフリードによるものだけではない。それ以外にも、多くの美術批評家がカラーフィールド絵画について論じてきた。それらの中には、商標デザインや商品と結びつけて解釈したり、50年代に普及したワイドスクリーンの映画との関係で考察したりするものも少なくなかった。それらは、カラーフィールド絵画が大衆文化との関わりにおいて受容されていたこと、そして、非絵画的要素を排除するモダニズムの考え方はひとつの解釈にすぎないことを示している。

そして、カラーフィールド絵画は、60年代半ばから70年代にかけてインテリアデザインとして重用されたことにも注目すべきである。コレクターなど個人の家における展示の様子がアメリカの新聞や雑誌にしばしば取り上げられた。それらは、美術館の展示室とは異なる日常空間での展示であり、絵画作品を周辺の事物との関係で鑑賞することを前提としたため、モダニズムの解釈が成り立たないものであった。さらに、70年代には、カラーフィールド絵画を模したインテリアデザインも登場するようになり、カラーフィールド絵画は、モダニズムの対極にある芸術の商業利用としてのキッチュに近づいていったのである。

カラーフィールド絵画の画家自身は、モダニズムに対して一定の理解を示す一方で、それと相容れない大衆文化への関心も同時に持っていた。しかし、モダニズム美術批評の影響力の大きさゆえ、彼らの大衆文化との関わりは見えにくくなっていた。本発表は、カラーフィールド絵画の受容において大衆文化が大きな意味を持っていたことを示すものであり、そのことで、モダニズムに限定されがちなカラーフィールド絵画に新たな文化的な解釈を与えようとするものである。